Ⅳ　論考

1　文献資料調査報告

茨城県中世城館総合調査委員会　史料部会

文献資料の調査は、県央・県北・県西・県南・鹿行地区を地区毎に分担して、一次史料・二次史料の収集を行った。資料収集の成果については、各担当者が各地区の総括を行うこととし、以下の各地区の総括を参照いただきたい。

文献資料を収集する中で確認できたことについて、若干言及しておきたい。それは、城郭に関する資料的な特徴に時代的な違いがあることであった。鎌倉期に関しては、時代的に最も古い時代であることもあって残存数は少ないことは致し方のないことであると思われる。南北朝期から室町時代初期に関しては、内乱の過程で攻城や合戦に参加した者が軍忠状等を作成して自己申告し、それに軍勢を率いる者等が承認したことを示す署判を行う形式で軍功の確認が行われていた。そのため、攻城や合戦に関する記載が一通の軍忠状の中で一連の流れとして把握することができ、防御施設等も書かれる場合もあり、記載も詳しく書かれる傾向を確認できる。

これに対して、室町時代後期から戦国期に関しては、軍忠状類の作成は行われなくなり、単発的な攻城や合戦に関する感状の発給によって軍功の評価が行われる事例が増える。そのため、攻城や合戦に関する記載も淡白な表現が増え、地名や城郭名を記すにとどまる場合が一般的になる。これは明らかに軍忠状を作成した時期と軍功評価のシステムが変化したことを示している。これは、軍事的な単位やその構成等の質が変化したことを示す可能性もあり、この点に関する今後の史料学的や軍事学的な検討が必要なように思われる。

他に攻城や合戦の状況を記す文献資料としては、戦国後期になると領主や武将間において交わされる書状類に記載が豊富になる。これは、戦いの広域化によって情報の共有化が必要になることの影響と考えられる。これらの文献資料に関して注意しなければならないことは、自らの方面の状況や戦果を誇張して記す傾向があると思われるため、史料的な批判を十分に行わなければならない。

また近世への転換期に作成される文献資料としては、軍功覚書や戦功覚書といった自らの戦功を後の段階で書き綴る資料類である。この資料類に関しては、合戦や戦局の推移を記すものもあるため記載が豊富であるが、自らの戦功を記すため十分な史料批判が必要と思われる。

以上のように、各時代における文献資料の特徴について言及してきたが、言及した事項も十分な結論に達している段階にはないため、今後も城郭を文献資料から捉えていくためには資料の収集・データベース化と共に、史料学的な深化が必要なように思われる。

（文責　佐々木倫朗）

県北地区

県北地域の城館関係史料について、一次史料は約 500 件、二次史料は約 1000 件採録した。その大半は中世を通じて県北地域に割拠した佐竹氏及びその一族・家臣に関するものである。時代的には戦国期のものが最も多いが、年代がはっきりしない史料も多く含まれる。それではまず、一次史料に登場した城館にまつわる用語から、県北地域における史料的特徴を見ていこう。

○○城・要害：はっきりと○○城などの形で検出できるのは南北朝～室町期がほとんどで、数も少ない。とはいえ、一次史料からは、車城（北茨城市：県北－168・390）、山尾城（日立市：県北－64・275）、石神城（東海村：県北－49）、湊城（ひたちなか市：県北－59）、太田城（常陸太田市：県北－61・132・498・499）、武生城（同上：県北－6・10・12）、利員城（同上：県北－42）、瓜連城（那珂市：県北－8・10・12）、額田城（同上：県北－40・41・498）、依上城（大子町：県北－43・45・47）、長倉城（常陸大宮市：県北－63）・部垂城（同上：県北－91・96）、野口城（同上：県北－498・499）などを検出できた。この他、鳥渡呂宇城（県北－52・54。常陸大宮市の金井城が有力比定地とされる）など比定地不明の城館も見られる。

戦国～豊臣期では、○○城・要害という言い回しは省略される傾向が強いが、内容から城館と判断できる史料は採録している。また、城主を本拠の城館名（もしくは郭名）で呼ぶこともあり（例えば、佐竹氏は太田と呼ばれる）、そうした史料も多数採録した。その結果、上記の他、龍子山城（高萩市：県北－115 など）、小場城（常陸大宮市：県北－62 など）、金砂山城（常陸太田市：県北－69）、大門城（北大門・南大門城。同上：県北－69・479）、久米城（同上：県北－401・464・466 など）、月居城（大子町：県北－80～82 など）など県北地域の主要・著名な城館はほぼ検出できたと言ってよい。

郭（曲輪）、櫓、堀、門、橋、土塁など各施設・構造物：県北地域については、城館を構成する各施設・構造物が登場する史料をほとんど検出できなかった。わずかに、戦国期の太田城、豊臣期の山尾城で確認できる程度である。太田城と城下は何度か火事に見舞われており、元亀 3 年（1572）「正月廿七日夜、松山梅江斎炎上、自馬場額田ト安藤ノ門ノ内火出吹キリ々々東」（県北－155）、天正元年（1573）「二月十七日義重納馬、同十九日午ノ時ヨリ酉ノ刻迄太田馬場鳥居小田カジ（火事）、五郎左衛門火ヲ出ス、東宿社務八幡宮塔・桜門・神宮寺悉焼却」（県北－160）とある。山尾城については、天正 19 年（1591）5 月 20 日に佐竹義重が家臣の田中隆定に「山尾城中門橋已下、普請無油断可申付事」（県北－275）などといった指示を出している。この他、隠居した佐竹義重が「北城」（県北－267 など）、弟の小場義宗が「中城」（県北－254）と呼ばれており、隠居後、それぞれ太田城の北城、小場城の中城（どちらも小字として残る）に移り住んだことに由来すると考えられる。

在番・番手・番：事例としてはわずかであるが、月居城（県北－85）、山尾城（県北－296・496）、太田城（県北－267・275）など、戦国～豊臣期にかけて確認できる。特に月居城の場合は在番の理由が明白で、佐竹・岩城氏が永正 13 年（1516）6 月の下野国縄釣合戦で宇都宮氏に敗れ、宇都宮軍に佐竹領への侵入を許した際、その防衛という役割を担った。

普請・作事：県北地域ではほとんど検出できなかった。上記の山尾城（県北－275・296）の普請の他、豊臣期に佐竹家臣和田昭為が長倉城で「とめ（留め）普請」（県北－433）を行うよう指示した事例などが確認できる。

宿・根小屋（根古屋）：宿については、城館に付随する施設である可能性を考慮し、宿が見られる史料はすべて採録した結果、50 件近く検出できた。一方で、家臣らの集住地とされる根小屋（根古屋）については、検出できなかった。

○○屋敷・在家：城館と言えるか、字面だけでは判断できないが、屋敷が約 30 件、在家が 10 件検出できた。人名がつく場合と地名がつく場合があり、その違いは不明である。文亀 2 年（1502）11 月 1 日付けの佐竹義舜知行宛行状写（県北－70）など、佐竹氏は屋敷や在家を家臣に宛行う事

例が度々見られる。いずれにせよ、場所の比定、現地調査が必要であり、詳細な調査が俟たれる。

次に、二次史料について。その信憑性や取り扱いには慎重にならざるを得ないものの、一次史料の多くが、佐竹氏の居城や有力な佐竹一族・重臣クラスの城館に関するものだったのに対し、一次史料では全く確認できなかった小規模な城館が多数検出できた。城主や築城者、築城年代、城館の歴史を記した史料も多く、「水府志料」、「松岡地理誌」といった近世成立の地誌類には、近世時点における遺構の様子が記されており、すでに湮滅してしまった城館にとっては貴重な情報である。また、「松岡地理誌」には絵図も描かれており、簡素なものの、近世における縄張図として注目される。

最後に、主に一次史料から、城館にまつわる争乱を中心に県北地域の政治史を見ておこう。平安末期の源平争乱では、治承4年（1180）11月に平家方の佐竹氏を源頼朝が攻めた。佐竹氏の本拠は太田城であるが、太田城は政庁としての位置づけが強く、佐竹方は天然の要害金砂山城に籠って迎え撃つも、一族の裏切りにより落城した（県北2－16～19など）。南北朝期には交通の要衝で南朝方が拠る瓜連城が佐竹氏ら北朝方との争点になった。建武3年（1336）2～12月まで周辺地域を含めて攻防の舞台となり、最終的に北朝方が瓜連城を攻め落とし、県北地域における北朝方の優勢を確立した。室町期に入ると、佐竹氏の内乱が勃発した（佐竹の乱）。この佐竹宗家と一族・国人の対立は、双方が鎌倉公方・関東管領上杉氏一族・室町幕府といった上位権力と結びつき、上位権力の対立と連動したため、断続的とはいえ長期にわたる内乱となった。政治史的背景は省略するが、額田城、馬坂城（稲木城とも。常陸太田市：県北－39）、和田城（常陸太田市：県北－53）、利員城、石神城、依上城、長倉城（県北2－84）、羽黒城（常陸太田市：県北－46）、小里城（同上：県北－48・51・467）、鳥渡呂宇城など、県北地域各地の城館が戦場となった。

戦国期に入ると、享徳の乱や佐竹氏の内乱に絡んで、湊城、小場城、久米城などが戦場となった。文明17年（1485）には岩城氏が常陸国へ侵攻、車城を攻め落とし、龍子山城の大塚氏を降伏させた（県北2－105など）。延徳2年（1490）閏7月には、佐竹家当主義舜が一族山入佐竹義藤父子によって太田城から追放され、佐竹氏の内乱は最終盤を迎えた。山尾城、金砂山城、大門城、小場城などが戦場となり、文亀2年（1502）または永正元年（1504）に義舜は太田城を奪回し、佐竹の乱を終わらせた。享禄2年（1529）10月、佐竹家当主義篤の弟義元が小貫氏から部垂城を乗っ取り、再び大規模な佐竹氏の内乱が始まった（部垂の乱）。川崎城（常陸大宮市：県北－93）、前小屋城（常陸大宮市：県北－95）などが戦場となり、天文9年（1540）3月、義篤が部垂城を攻め落とし、部垂の乱は終わった（県北－91～99）。

これ以降、県北地域では大きな戦乱は鳴りを潜めるが、天正2・5年（1574・1577）の車氏の乱（県北－165・166・168・177）、同17年（1589）の額田小野崎氏の乱（県北－243～247）が起き、どちらも佐竹氏が車城、額田城を攻撃、降伏させた。天正18年（1590）7月、豊臣秀吉は佐竹領のうち佐竹氏の居城（太田城）など4城を残して破却するよう指示した（県北－262）。実際は徹底されたわけではなかったようだが、小規模な城館はこのとき廃されたと考えられる。翌年3月には佐竹義宣が居城を水戸に移し、隠居の父義重が再び太田城主となった。慶長7年（1602）5月、長く県北地域を支配した佐竹氏・岩城氏が転封・改易となり、一部を除く県北地域の主要城館も間もなく廃城になったと推測される。

以上、一次史料に恵まれているとは言い難いものの、県北地域の城館は各時代で抗争の舞台と

なり、金砂山城、瓜連城、太田城など、政治史において重要な位置にあった城館も少なくない。また、二次史料については、中世を通じて県北地域に割拠した佐竹氏（秋田藩）や近世に県北地域を支配した水戸藩関係を中心に豊富な史料が残されていることが分かった。小規模な城館も含め、築城者、築城年代、歴代の城主、城館にまつわる争乱の歴史などを考究する上で十分な材料が揃っていると言ってよい。勿論、二次史料の記載をそのまま鵜呑みにするのは慎重であらねばならないし、採録できたのも極一部に過ぎない。一次史料をもとに、県北地域の政治史を復元しつつ、各城館の位置づけやどのような役割を果たしたのか、実地調査は言うまでもなく、考古学や絵図学などを含めた、複合的な検討が今後なされることを期待したい。

（文責　森木悠介）

県央地区

県央地域における中世城館跡は、現在確認できるもので約 100 を数える。そのうち史料上確認できるものとなると、ごく一部に限られる。同地域の特徴として、中山信名や小宮山風軒、宮本茶村などのすぐれた学者が多く輩出されたことにより、彼らの手による良質な史料集・地誌類が江戸時代に多く編さんされていることがあげられる。そこから得られる城郭に関する情報は、信用し得るものであり、数も多い。とくに『新編常陸国誌』第八巻には「故城」「館趾」の項目が設けられており、常陸国全域の城館跡・館跡が網羅されているため貴重である。

以下、史料に登場する県央地域の城郭について、時代ごとに述べていきたい。

県央地域において、史料上確認できる城郭の初見は、鎌倉時代である。吉田社領の領家である小槻氏の預所が発給した下文写に吉田城（水戸市）の一部に比定される「堀内」「宿戸」が確認できる。さらに鎌倉末期の嘉暦 2 年（1327）には、同社領預所の僧教有とその代官大進坊承秀が在地の人びとと結託し、城郭（見川城（水戸市）か）を構えて領家の小槻氏に反抗をしている様子が確認できる（「吉田神社文書」）。

南北朝期に入ると、南北両朝の対立に関連した史料に県央地域の城館が散見される。まず、建武 4 年（1337）に烟田時幹が北朝方の佐竹義春に従って南朝方の笠間城（笠間市）を包囲している（「烟田文書」）。また興国元年（1340）に南朝方の北畠親房が結城親朝に宛てた書状では、飯沼楯（茨城町）が落城したことを伝え、この機に親朝の出兵を要請している（「相楽文書」）。

室町期には、嘉慶元年（1387）7 月にはじまる小田孝朝の乱に関連して難台山城（笠間市）が史料上多く登場する（「烟田文書」「一木文書」「町田文書」など）。小田氏が小山義政の遺児である若犬丸を匿っているという情報をきっかけにして始まったこの戦いは、犬懸上杉朝宗が小田に出陣し、これに対して小田氏の執事である信太氏や小田氏の一族である岩間氏らが小田を離れて男体山に立て籠もり、同 2 年（1388）5 月まで約 10 ヶ月続く長期戦となった。鎌倉公方足利氏満による小田氏の勢力削減という側面が強いため、室町幕府が孝朝の赦免を求めたり参陣しない東国の武士が出たりするなど、当該期における幕府と鎌倉府との微妙な関係を如実に物語っている。

また、二次史料にはなるが、応永末期の 6 月 21 日に大掾満幹が青屋祭のため府中へ赴いた隙を狙って、河和田の江戸通房が水戸城（水戸市）を奪取した記事が確認できる（「新編常陸国誌」「水府地理温故録」など）。これ以降、天正 18 年（1590）に佐竹氏に奪取されるまで江戸氏は水戸城下の建設・経営に取り組むこととなる。

室町幕府と鎌倉府との対立に関連するとみられる永享 2 年 (1430) の佐竹義憲感状写には、田谷城 (水戸市）において合戦があったことが記されており、県央地域においても両者の対立の影響があったこと

がうかがえる（「秋田藩家蔵文書二十一」）。

戦国期には、江戸氏のもとで明応年間に水戸城「大坂宿」がひらかれ、祇園社が勧請されていることが「増修和漢合運図」から確認できる。また、この頃から江戸氏による南郡進出の拠点となる小幡地域への進出が精力的に推進されている。享禄2年（1529）に「宿城助九郎」なる人物が小幡で打死したことが「六地蔵寺過去帳」に確認される。さらに天文元年（1532）には、江戸忠通が小幡義清を殺害し、同氏を服属させることに成功している（「水府志料」）。なお天正13年（1585）からはじまる江戸氏と大掾氏との合戦に先がけて、江戸通長・通澄は連名で小幡城（茨城町）の大塚弥三郎と小幡孫二郎に対して小幡城の守備強化と片倉砦の構築を命じており、同城が軍事的に重要な地域であったことがうかがえる（「鳥羽田文書」「水府志料」）。

同16年（1588）12月からはじまる江戸氏の内紛である神生の乱について、「和光院過去帳」や「新編常陸国誌」には、水戸城や神生館（水戸市）に関する記事が確認できる。

豊臣政権下において、佐竹氏が天正18年（1590）12月に江戸氏から水戸城を奪い入城すると（「新編常陸国誌」「常陸編年」）、同城の普請の記事が多く見られるようになる。文禄元年（1592）の朝鮮出兵に際して、名護屋に出陣した当主義宣が国元の和田昭為に対して、水戸城下建設に関する詳細な指示を出している（「秋田藩家蔵文書十六」「阿保文書」など）。同2年（1593）閏9月に義宣が常陸に帰国すると、水戸城の建設が本格的にすすめられるようになる。その様子は「大和田重清日記」に詳しく記されており、貴重である。水戸城の普請は、その後も継続して進められ、慶長4年（1599）に本丸作事の命令が下されたり、国替え直前の同7年（1602）正月にも普請が行われたりしていることが確認できる（「秋田藩家蔵文書十九・三十一」）。

関ヶ原の戦いの後、同年（1602）7月に佐竹氏が突然の国替えを命じられると、それに関する当主義宣から国元（水戸）への指示が確認できる（「秋田藩家蔵文書四十」「佐竹氏旧記」）。

（文責　山縣創明）

県西地区

県西地区の城郭等に関する文献資料を概観すると、その初見は、『吾妻鏡』所載の治承 4 年(1180)11月の八田館(筑西市)に関する記述である。しかし、その後は鎌倉期に関しては資料に乏しく、以後に確認できるのは、延元元年(1336)8月の南北朝期の資料となる。それ以降は、南北朝期に小田(つくば市)に北畠親房が滞在することもあって、南朝方と北朝方が激しく抗争し、小栗城や伊佐・関・大宝城(筑西市)をめぐって戦いが激しく展開し、それに伴う軍忠状等の資料が多く確認できる。資料的には延元元年(建武 4 年 1336)から康永 3 年(興国 5 年 1344)まで確認でき、その間は、筑西市周辺が茨城県域の南北朝の戦乱の一つの核となっていたことがわかる。

その後は、室町期の応永年間に上杉禅秀の乱に伴う小栗城をめぐる攻防が行われる。上杉禅秀の乱は応永 23 年(1416)に起きたのだが、乱に際して禅秀の与党として行動した小栗満重が乱の処理に不満を持ち、鎌倉公方足利持氏に対して反抗的な行動を繰り返したとされる。この満重の行動に対して、持氏は自ら兵を率いて出陣して攻撃し、満重はこれに破れて小栗城において自害する(小栗満重の乱)。この一連な戦いに関する小栗・真壁・伊佐城等の周辺の城郭に関する資料が残されている。

また永享12年(1440)年に結城城(結城市)を本拠とする結城氏朝等によって、結城合戦が引き起こされる。氏朝等は、室町幕府や上杉氏等によって討たれるのだが、この結城城をめぐる戦闘に関する軍忠状や感状を確認できる。

そして、享徳年間になると、享徳の乱(1455-83)に伴って古河城(古河市)に関する資料を多く確認できる。古河城に関することと注目できる事柄は、鎌倉公方足利成氏が乱において上杉氏に対抗するために古河城を自らの居所とするのだが、応永 3 年(1396)の小山若犬丸の乱に際する資料等で「古河御陣」と島津直忠軍忠状で記されている。小栗満重の乱にも同様な文言が確認できるため、交通・軍事的な要衝として応永年間において既に注目されていることがわかる。また「古河城」という城郭としての表現は、結城合戦段階から確認できる。古河城に関しては、足利成氏の入城以降は古河公方の御座所となったこともあって、以後も永正年間に足利政氏と高基の対立より始まる古河公方家の内紛段階、その後には北条氏康の甥にあたる足利義氏の古河公方継承をめぐる争いが関東全域を巻き込んで行われるため、多くの資料が確認できる。義氏の古河城入城後も、天正年間に本格化する北条氏と佐竹・結城氏等の連合勢力との抗争においても、両者の中間に位置する地理的関係から多くの資料が確認できる。

戦国期に関して注目できる資料群は、永禄年間から天正 2 年(1574)にかけて関宿城(千葉県野田市)をめぐって 3 期にわたる攻城戦に伴う資料群である。関宿城自体は茨城県域ではないが、県境に位置しているため、利根川を挟んだ周辺の栗橋・水海城(古河市)等に関する資料が確認できる。特に五霞山王山砦は、関宿城に対する包囲のための陣城として築かれた砦であるが、和平に際してその「破却」(破壊)が重要視されている。和平において戦闘意志の放棄を示すために臨時的に築城された陣城の破却事例として注目できる。

また城郭が現実に使用されている時期に城の構造や部分をどのように呼称していたのかという点で注目できるのが、永禄 12 年(1569)正月に行われた海老ヶ島城(筑西市)をめぐる攻防戦に関する資料である。太田資正は、正月 17 日の巳刻(午前十時頃)に「宿城」を攻め破った処、城主の平塚刑部大輔が降伏を申し出てきて人質を取って降伏を許したことを記している(県西 349)。それに対して、長尾憲景は午刻(正午頃)に海老ヶ島城を「巣城」ばかりとしたことを伝えている(県西 350)。また多賀谷政経は、「実城」ばかりにした結果、降伏の申し出があったとする(県西 348)。これをみると、「巣城」・「実城」が城やその外郭を含む防御施設の中で中核をなす本体部分を指す語であると理解できるが、その本体部分に関しても、人物によっては「巣城」と「実城」と異なる表現を用いる場合があったことがわかる。これに対して「宿城」は、「宿」という語を含むことから町場を含む空間であり、その町場を含み込んで防御設備を設けた空間で、城の中核部分の外郭に位置する場や施設であったと考えられる。このような語句を用いて城の構造や部分を用いて表現されていたことが確認できるが、「巣城」と「実城」の表現の違いのように、人物によって同一の構造物や施設を表現することが異なる場合があり、文献資料から城郭の構造を考えていくためには、慎重な検討が必要なことを窺うことができる。

(文責　佐々木倫朗)

県南地区

史料に城の名前が現れるのは、そこで何かしらの出来事、具体的には合戦などが発生した時のことが多いといえる。この点、県南地域の城館についてみていくと、史料的制約は大きいこともあるが、城館の名前が多くみえるのは南北朝期と戦国期である。

鎌倉期の事例については、わずかに建久 4 年（1193）の政変に際し、八田知家と対立した多気義幹が居城である多気城（つくば市）に籠って防備を固めたという話が『吾妻鏡』にみえるが、これを除くと、常陸府中に存在したとみられる「留守所御館」の存在を確認できるに留まる。後

者は外城（石岡市）の一角にあったとする説もあるが、確証はない。史料上に県南地域の城館を確認できない背景には、譲状など、当該期に関する武家のまとまった史料が、県南地域の家に残っていないという史料的制約が大きな要因と考えられる。

南北朝期については、特に南北朝前期、建武～康永年間（1334-45）に繰り広げられた北朝方と南朝方の抗争である「常陸合戦」の時期に関する史料が多く残っている。当初は北部の瓜連城（那珂市）を舞台に繰り広げられた戦いだが、同城の落城以降は常陸南部、西部での合戦が中心となっており、その中で、県南地域の城館についても、府中城（石岡市）や志筑城（かすみがうら市）などの名前が軍忠状等に現れる。特に頻出するのは、南朝方の小田氏の拠点であり、「常陸合戦」の最中の建武 5 年（1338）には北畠親房が入城し、以降暦応 4 年（1341）に落城するまで、常陸南朝勢力の中心的拠点となり、親房が『神皇正統記』を執筆したといわれる小田城（つくば市）である。また、北畠親房が小田城に入るまでの経路には、神宮寺城、阿波崎城（共に稲敷市）などの存在も確認できるほか、康永 2 年（1343）に関城（筑西市）・大宝城（下妻市）を失陥し、親房が大和吉野へ逃れた後も、常陸に潜伏した春日顕国が翌年 3 月に挙兵しいて攻撃を仕掛けた「馴馬沼田城」も県南地域の城館であった。その他、北朝方が小田城を攻撃するに際し、小田城周辺に多数の「陣城」を構えている。これらが現在のどこの城館跡に当たるのか、不明な場所も多いが、小田城を巡っては、周辺の大小さまざまな城の中で戦いが繰り広げられたのであった。

また、南北朝後期については、嘉慶元年～2 年（1388-89）にかけて、宍戸難台山城（笠間市）を舞台とした「小田氏の乱」に際し、鎌倉府の軍勢が常陸南部から軍を進め、難台山城を包囲したことが確認できる。その経路は布川城（取手市）→小田城→志筑城→山崎（石岡市）を経由して朝日山（笠間市）に布陣したことが、参陣した武蔵高麗氏の軍忠状にみえ、これらの城が当時活用されていたことは間違いない。

室町期については、県南地域を舞台とする戦い自体が多くない。享徳の乱に際しての、長禄 3 年（1459）の信太庄合戦など、大規模な戦いがなかったわけではないが、城館の名前がみえる史料はほとんど確認できない。その中の事例としては、寛正年間頃（1460-66）の小田領周辺を巡る小田氏と上杉氏勢力の抗争の中で、上杉方が「金田要害」に立て籠もったことが確認できる。これは小田城に程近い金田城（つくば市）のことと考えられるとともに、筑波地域が小田―上杉間の係争地域であったことがいえる。また、明応～永正初め頃（1489-1505 頃）に起こった小田氏の内紛に際し、小田城に居た小田政治を擁立する勢力は、土浦城（土浦市）に拠点を構えていたその兄顕家を攻撃する姿勢をみせている。

戦国期については、県南地域でも多数の合戦が確認され、史料も多く残っていることもあり、たくさんの城名が史料から確認できる。最も多くみえるのは、弘治～永禄年間（1555-69）に上杉氏や佐竹氏、下総結城氏に度々攻められ、合戦の舞台となった小田氏の居城である小田城、永禄 12 年に同城を失陥した小田氏治が、その後居城とした木田余城や藤沢城（共に土浦市）、氏治を保護した重臣菅谷氏の土浦城などが挙げられる。また、天正 13～14 年（1585-86）、16 年（1588）の佐竹・江戸氏と大掾氏の合戦である府中合戦の係争地ともなった田余砦（玉里砦）や小河城、竹原城、片倉砦（いずれも小美玉市）、大掾氏の居城である府中城も、佐竹方の史料を中心にその名をみることができる。

その他、佐竹氏ら「東方之衆」と後北条氏方の常陸における最前線となり、後北条氏により「牛久在番」が置かれた牛久岡見氏の牛久城（牛久市）、「東方之衆」の一員である下妻城（下妻市）

の多賀谷氏との最前線となった足高岡見氏の足高城（つくばみらい市）、やはり後北条氏方に立った土岐氏の江戸崎城（稲敷市）、龍ヶ崎城（龍ケ崎市）、豊島氏の布川城、森屋相馬氏の守谷城（守谷市）などが、「東方之衆」の勢力では、武蔵から常陸へ入り、佐竹氏に拠点を預けられた太田資正の片野城、佐竹氏から真壁氏に預けられた柿岡城（共に石岡市）なども、複数の史料から確認できるところである。

また、豊臣政権が後北条氏の情報を集めて作成した城の一覧や、主に岡見氏や土岐氏の勢力圏において、近世に作成された城と城主の一覧のような史料からも、多くの城館の名前を確認できる。特に後者については、同時代史料では確認できない城もあるが、岡見氏や土岐氏の勢力圏内には、相当数の城が存在したことが、ここからいえるだろう。

（文責　中根正人）

鹿行地区

鹿行地域については、西と南を香取海、北を涸沼、そして東に鹿島灘と、四方を水に囲まれた地域であった。そのため、外部からの侵攻を受けにくい環境にあったといえる。そのような状況や史料的制約もあり、合戦等でもその城の名前が出ることは、他地域と比較すると少ないといえる。一方で、鳥名木文書や烟田文書、芹沢文書といった家伝文書が多数残っている点から、譲状などの形で城館の名前がみえる点は大きな特徴といえる。

鎌倉期については、その鳥名木文書に残る譲状にみえる鳥名木氏の屋敷、烟田文書に残る譲状にみえる、行方氏の持つ鹿島郡の立原屋敷（鹿嶋市）が史料上に現れる。前者は現在も行方市鳥名木に残る鳥名木館を指しており、その後も鳥名木氏の拠点として存続した。後者については、南北朝期頃に行方氏から烟田氏に売られた所領に関する譲状にみえるが、こちらは鎌倉中期頃以降の史料からはみえなくなっており、ある段階で行方氏は当該屋敷を手放した可能性が考えられるだろう。

南北朝期については、鹿島郡・行方郡において、南朝方、北朝方がそれぞれ存在していたことは間違いないが、この地域が合戦の舞台になったことを示す史料は残っておらず、烟田氏や鳥名木氏などが、郡の外に出て戦っていたことが、彼らの提出した着到状や軍忠状から確認できる。他方、観応～文和年間の行方郡では、下河辺行景に鎌倉府が安堵した所領について、両使の宍戸朝世・武田高信、次いで宍戸朝里・益戸国行によりその打渡が行われようとしたが、在地の手賀氏や小牧氏が反発し、それぞれが倉河、小牧（共に行方市）に「城郭」を構えて抵抗したことが確認できる。これらが元々倉河氏や小牧氏が拠点としていたものか、新規に築かれた城かは不明だが、何れにせよ、鎌倉府の遵行に対し、在地勢力が「城郭」に拠って抵抗したことは間違いない。

室町期については、例えば永享 12～13 年（1440-41）結城合戦に際し、行方郡内でも結城方と幕府・上杉方の合戦が、西蓮寺（行方市）で繰り広げられたことが、鳥名木氏の文書から確認できる。また、応永 23～24 年（1416-17）の上杉禅秀の乱に際し、禅秀方についた宮ケ崎氏や用次氏らが、公方方であり、この頃対立していた烟田氏の領内（鉾田市）を放火したことが、烟田氏の文書からみえるなど、郡内で戦乱がまったくなかったとは言えないが、史料から城の名前を追えるものは多くない。

戦国期については、鹿行地域においても戦乱が繰り広げられており、数の城館の名前を確認できる。特に鹿島氏の居城であった鹿島城（吉岡城、鹿嶋市）については、大永 4 年（1524）に周辺勢力を巻き込んで勃発した内紛である「鹿島大乱」の戦場となったことが、軍記物『鹿島治乱

記』や系図類で確認できる。更に、永禄末～天正年間（1569-88 頃）に断続的に繰り広げられた、鹿島家中の内紛に際しても、鹿島城を巡って合戦が度々繰り広げられており、天正 9 年の江戸氏による直接攻撃や、同 14 年の鹿島通晴と貞信・清秀の攻防などにおいて、史料に現れる。

また、下総矢作城の国分胤政が、家中の内紛によるものか、天正前半頃に一時矢作を離れ、鹿島郡に移り、津賀城（鹿嶋市）へ入っていたことが、史料からも確認できる。

行方郡については、天文 15 年（1546）に郡内や小田氏、大掾氏を巻き込んで繰り広げられた「柄ヶ崎合戦」に際し、小田氏と結んだ小高氏らが玉造城、手賀城（共に行方市）の攻撃を図り、忍びによる謀略を用いて攻略を図ったことが史料から伺える。

また、天正 12 年（1584）、芹澤城（行方市）を巡る合戦が起こったことが、大掾清幹や玉造重幹の感状から確認できる。この時の敵が何者であったかは判然としないが、大掾氏や玉造氏が芹澤城の救援に駆けつけたとみられる。

その他、系図史料によるが、麻生氏と嶋崎氏の抗争の末、麻生城（行方市）が奪われて麻生氏が没落したとする記事や、県南地区で述べた府中合戦の中で、大掾氏らが行方武田氏の拠点の一つである高岡城（行方市）を攻撃したことが確認できる。

鹿行地区で特徴的な史料として、烟田氏に関する記録である「烟田旧記」がある。この中には、烟田城（鉾田市）を始めとする烟田氏領内の城館とみられる名前が確認できるほか、鹿島・行方両郡に点在する城館についても、同書でしか確認できない記事が多数確認できる。また、『南郡諸氏譜』には、近世に「南方三十三館」などと呼称された、鹿行地域の領主とその居館の名を確認することができる。

更に、『水府志料』など近世に作られた地誌類にも、各地の村に存在した城跡や屋敷に関する記述が多数みられる。これらの中には、現在も遺構が確認できるものもある一方、具体的な所在が不明確なものも存在している。鹿行地域は、狭い地域に多数の城館跡が確認されているが、史料上からも、一定数の城館の存在を伺うことができるといえるだろう。

（文責　中根正人）

参考文献

高橋修編 2017　『佐竹一族の中世』高志書院